

論文 | Article

わが国における「遺跡まつり」の現状と新たな展開

Current State and New Trend of “Archaeological Site Festival” in Japan

櫻井 準也

SAKURAI, Jun'ya

尚美学園大学
総合政策学部教授
Shobi University

2021 年 6 月

June.2021

わが国における「遺跡まつり」の現状と新たな展開

Current State and New Trend of “Archaeological Site Festival” in Japan

櫻井 準也

SAKURAI, Jun'ya

[要旨]

近年、日本各地の古墳や遺跡において遺跡まつりが開催されている。遺跡まつりは、地元にある遺跡の周知や埋蔵文化財への理解を促す「教育普及型」と遺跡を観光資源や町おこしに積極的に活用しようという「町おこし型」とに大まかに類型化される。近年になって「町おこし型」の遺跡まつりが増加する中で、2010年代以降になると「町おこし型」の遺跡まつりに新たなタイプのものが登場するようになった。本稿では、この新たなタイプの遺跡まつりの一例として大阪府高槻市で開催されている「古墳フェス はにコット」の事例を紹介した。このイベントではアートイベントや音楽イベントに加えて、様々な考古学グッズを扱う店舗が集まることが最大の特徴である。こうした新たな遺跡まつりが登場した背景に若者を中心とした考古学ブームが存在することを指摘し、遺跡まつりが現代社会と考古学の関係を探る契機となることを示した。

キーワード

遺跡まつり、町おこし、古墳フェス、考古学マニア、考古学ブーム

[Abstract]

In recent years, "archaeological site festival" is held at the Kofun (ancient tomb) and archaeological site all over Japan. the archaeological site festival can be roughly categorized into the "education and information type" which make known the presence of local archaeological site and deepen understanding of buried cultural property, and the "town revitalization type" which positively utilized the archaeological site for regional tourism or "town revitalization". While the "town revitalization type" of archaeological site festival has increased in recent years, it became that a new type of archaeological site festival came to appear after the 2010s. In this paper, I introduced the "Kofun Festival Hani-kotto" currently held in Takatsuki city, Osaka prefecture, as an example of archaeological site festival of this new type. It is the greatest features of this event that the stores treat various archaeology goods in addition to holding art event or music event. I pointed out that the archaeology boom affected Japanese young man and served as the background of this new type of "archaeological site festival" appeared, and showed that "archaeological site festival" serves as an opportunity which explores the relation between modern society and archaeology in Japan.

Keywords:

archaeological site festival, town revitalization, Kofun festival, archaeology fan, archaeology boom

1. はじめに

筆者は、以前からわが国の遺跡と現代社会の関係について関心を持ち、その繋がりを示す様々な資料を収集・分析してきた(櫻井 2014b、櫻井 2015、櫻井 2016c、櫻井 2021)。その中でも地域に存在する古墳や貝塚などの遺跡が契機となって開催されるようになった「遺跡まつり」(図1)について現地調査を開始したのが2005(平成17)年のことであり、その後「遺跡まつり」に関するいくつかの研究成果を発表した(櫻井 2006、櫻井 2009、櫻井 2014a、櫻井 2016a・b)。また、「遺跡まつり」には地域の文化財としての遺跡の周知や遺跡を利用した地域の活性化といった側面だけでなく、まつりに参加することによって地元の小・中学生に地域アイデンティティが創出されるという観点からも考察を加えた(櫻井 2014a)。

これに対し、長年にわたって全国の遺跡まつりの調査・見学を実施する中で、最近になって全国各地で開催されている「遺跡まつり」に変化が生じていることを感じている。そこで本稿では、2010年代頃までの「遺跡まつり」の開催状況について簡単にまとめたうえで、最近の「遺跡まつり」にみられる新たな傾向とその背景について、主に考古学ブームという観点から若干の考察を試みてみたい。



図1 全国で開催されている「遺跡まつり」のチラシやポスター

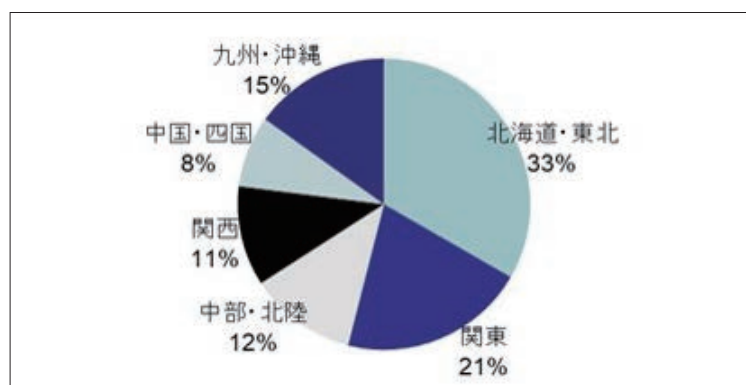


図2 「遺跡まつり」の開催地域 (N = 126)

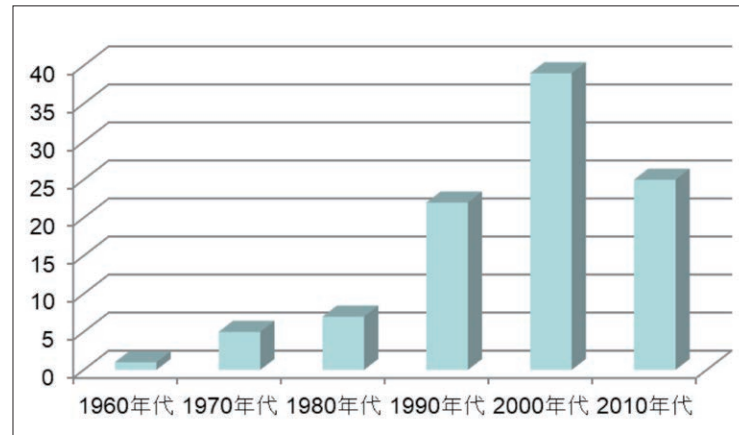


図3 「遺跡まつり」の初回開催年（2016年の集計）

2. 「遺跡まつり」の現状

「遺跡まつり」とは、「〇〇遺跡まつり」あるいは「〇〇古墳まつり」などと称される全国各地の遺跡や古墳などで開催される地域イベントであり、現在全国100カ所以上で開催されている（櫻井2016b）。通常、「遺跡まつり」には様々な組織や団体が関わるが、まつりの主催者で最も多いのが実行委員会、それ以外では地元自治体、教育委員会、NPO法人、博物館、埋蔵文化財センターなどであり、後援は地方自治体、教育委員会、観光協会、商工会などが多い。次に、催し物としては、教育委員会や博物館などが主体となる場合は遺跡説明会、体験型のイベントである火おこし・勾玉づくり・土器づくり・弓矢体験・古代食体験などがあり、興行的な色彩が強い「遺跡まつり」では遺跡に関連するイベントは一部であり、その多くが遺跡とは直接無関係のダンスや郷土芸能、各種コンサート、移動動物園、さらには地元物産販売やフリーマーケット、花火の打ち上げなどが実施されることが多い。

2016（平成28）年にインターネットで検索・集計したところによると、「遺跡まつり」の開催地域は北海道・東北地域が33%と全体の1/3を占め、次いで関東地方が21%、九州・沖縄地方が15%などとなっており、「遺跡まつり」の開催が盛んな地域は東高西低である（図2）。また、「遺跡まつり」の開始年をみると、1980年代以前から開催されている事例は少なく1990年代からその数が増加し、2000年代や2010年代から開催されるようになった事例が過半数を占めることがわかる（図3）。このような傾向の背景として、1990年代以降に多くの団体が参加する興行的色彩の強い地域イベントとしての「遺跡まつり」が定着したことがあげられる。

「遺跡まつり」はその規模や主催者、各種イベントの内容など実に様々であるが、ある程度の類型化は可能である。これについては以前に（Ⅰ）～（Ⅲ）の三類型を提示したことがある（櫻井2009）。このうち（Ⅰ）は、まつりの実行委員会や地元自治体などの主催であり、商工会や地元企業などがバックアップし、コンサートや郷土芸能、ダンスの発表会、さらには地元物産販売など遺跡とは直接関係のない催しが多い、興行的色彩の強い地域イベントの集合体である町おこし型の「遺跡まつり」である。これに対し、（Ⅲ）は地元の教育委員会や博物館が主催し、生涯学習や文化財保護の観点から地元の遺跡について知ってもらい、埋蔵文化財や文化遺産としての遺跡の重要性を認識してもらうことを目的にした

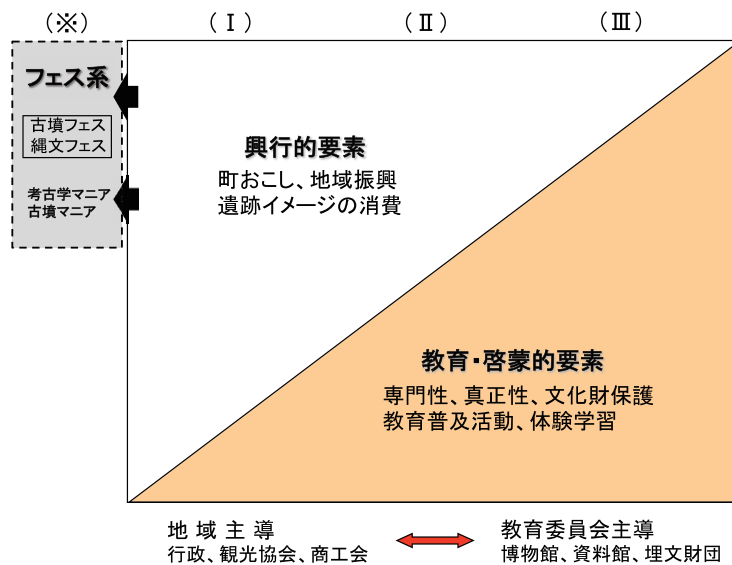


図4 「遺跡まつり」の類型

教育普及型の「遺跡まつり」で、遺跡の解説や出土遺物の展示、火おこし・勾玉作り・古代食の試食などの体験コーナーが中心の「遺跡まつり」である。そして、（Ⅱ）は両者の中間型に位置付けられる「遺跡まつり」であり、（Ⅲ）の教育普及型の「遺跡まつり」に遺跡とは直接関係のない地域イベントや地元物産販売・フリーマーケットなどが加わることによって、（Ⅰ）の町おこし型の「遺跡まつり」に近づいたものである（図4）。こうした「遺跡まつり」の類型化を試みたのは、2009（平成21）年に開催された文化遺産活用に関するシンポジウムの際であったが、その後各地で開催される「遺跡まつり」の増加に伴って「遺跡まつり」のあり方が多様になり、主催者や参加者、さらには開催される催し物に変化がみられるようになった。その中でも近年になって新たに登場した「遺跡まつり」として現在注目しているのが、図4の（※）のカテゴリーに含まれる「〇〇フェス」や「〇〇フェスタ」と称されるフェス系「遺跡まつり」である。

3. 新たな「遺跡まつり」の出現

（1）「まつり」から「フェス」へ

本稿では、地域に残る古墳や貝塚などの遺跡で開催されるまつり^{（1）}を「遺跡まつり」と記述したが、最近になって従来のもとは異なる印象を受けた「遺跡まつり」が「〇〇フェス」や「〇〇フェスタ」と称されるフェス系「遺跡まつり」である。周知のように、「フェス」は「フェスティバル」（festival）から来ているが、「フェスティバル」は祭礼や祭典、祝日や祭日、文化的催しなどを意味している。「カーニバル」（carnival）も祭礼や祝祭を意味するが、こちらは通りを使ったパレードや皆で参加して楽しむ祭りであり、見て楽し

^{（1）}「祭り」や「まつり」という表現については、地方自治体が使い分けをしていることがある。例えば、埼玉県川越市では神事を伴う氷川神社の「例大祭・神幸祭」（10月14・15日開催）には「祭」を使用し、本来神幸祭の付け祭りである「川越まつり」（10月第3土日曜日開催）や「百万灯まつり」などイベント系の祭りには「まつり」を使用している。

む「フェスティバル」とは異なる。また、わが国ではフェスやフェスタというと音楽イベントやアートイベントをイメージするのが一般的である。

フェス・フェスタ・フェスティバルという名称を使用している「遺跡まつり」としてあげられるのが、東北地方の「三内丸山遺跡縄文アートフェスタ」（青森県三内丸山遺跡）、「縄文の森フェスタ冬のコンサート」（岩手県御所野遺跡）、「地底の森フェスタ」（宮城県富沢遺跡）、「JOMON ART フェスタ（秋田県大湯環状列石、伊勢堂岱遺跡）」、関東地方の「縄文体験フェスティバル」（千葉県堀之内貝塚）、九州地方の「古代の謎フェスティバル」（福岡県王塚装飾古墳）、「大友氏遺跡フェスタ」（大分県大友氏館跡）などであるが、県レベルで開催されるイベントである「あおり JOMON フェスタ」（青森県）、「縄文フェス 信濃川流域の火焰型土器と雪国の文化」（新潟県）、「群馬古墳フェスタ」（群馬県）などもフェスやフェスタが用いられている。こうしたフェス・フェスタ・フェスティバルといった名称の使用については 2002（平成 14）年の「縄文の森フェスタ 2002」（岩手県御所野遺跡）が比較的古い事例であると思われるが、わが国の「遺跡まつり」においては当初、コンサートやアートイベントにフェスやフェスタの名称が使われる傾向があったが、近年の流行や目新しさから「遺跡まつり」にフェス・フェスタ・フェスティバルの名称が使用されるようになったと考えられる。

また、このような「遺跡まつり」をめぐる現状の中で、遺跡を活用した地域振興という要素を踏襲しながら、アートイベントや音楽イベントに加えて若者を中心に増加しているとされる考古学マニアをターゲットとしてグッズ販売を行う店舗が重要な位置を占める新たな「遺跡まつり」が登場している。

（２）「古墳フェス はにコット」の事例

新たに登場した「遺跡まつり」の事例としてあげられるのが、「アートと古墳のフェス」として 2012（平成 24）年より大阪府高槻市今城塚古墳公園で開催されている「古墳フェス はにコット」である（写真 1）。ちなみに「はにコット」は「はにわ」（埴輪）＋「マスコット」の意味で「マスコット」には「人々に幸運をもたらすと考えられている人・動物・物」という意味があり、「はにわ」（埴輪）がそのマスコットになることを願って「はにコット」と命名したという（実行委員会ホームページより）。このように「古墳フェス」という表現や開催地の古墳名（今城塚古墳）を使用せずに若者受けする「はにコット」と命名している点が特徴的である。

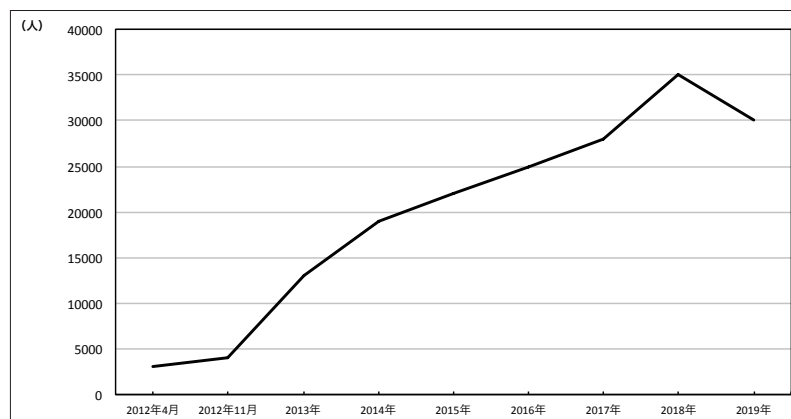


図5 「古墳フェス はにコット」の来場者数の推移

「古墳フェス はにコット」の来場者は第1回(2012年4月)には3000人程度であったが、現在では約3万人に増加している(図5)。主催は、はにコット実行委員会、後援は大阪府高槻市、高槻市教育委員会、高槻市商工会議所、高槻市観光協会、協賛は地元企業や古墳にコーフン協会、会場は継体天皇陵とされている今城塚古墳の西側エリアであり、会場は大きくARTエリア、販売エリア、飲食店エリア、はにわステージ(ダンスや古代ゆるキャラ大集合などの催しを開催)、音楽ステージに区分されている。現地調査を実施した2017(平成29)年の店舗数は、古墳作品展示販売が111店舗、古墳古代グルメブースが26店舗、ワークショップブースが20店舗、音楽ブースが2カ所・出演者30組であった。古墳周辺にはダンボール古墳村、ネオ古代の森、古代大迷路、はにわを作ろう!、遺跡発掘体験コーナーなどがあり、スペシャルショップのエリアでは大阪府弥生文化博物館や名古屋市志段味古墳群、古墳にコーフン協会などのブースやNPO法人高槻市文化財スタッフによる古墳ガイドの受付所があった。また、当日は天候にも恵まれ、会場は家族連れや若者で賑わっていた。

このフェス(「遺跡まつり」)では販売エリアや飲食店エリアの出展者には古墳・埴輪・古代がテーマの商品を必ず1点以上販売することが義務づけられている。また、「古代・古墳とアート表現の融合」から古墳グッズや古墳フードが生まれることから、このフェスは「アーティストの登竜門的フェス」として捉えられている。なお、このような考古学とアートの接近については、既に2000年代初めに現代アートと考古学の関係性について指摘したイギリスの考古学者レンフリューの著作(Renfrew,C,2003・2004)がある。これに対し、わが国では千葉県船橋市の飛ノ台史跡公園で2001(平成13)年から『縄文コンテンプラリーアート展 in 船橋』(2014年からは『縄文コンテンプラリー展 in 船橋』)が開催され、2006(平成18)年には青森県立美術館で『縄文と現代—二つの時代をつなぐ「かたち」と「ところ」』展が開催されている(古谷2019)。古谷嘉章氏によれば、その後「縄文と現代アートの交錯」の事例として2009(平成21)年の青森県三内丸山遺跡における『三内丸山アートフェスティバル・フィールド・ザ・ルーツ』、2012(平成24)年の長野県長和町における『ワンネス・キャンプ—縄文と再生』といったフェスがゲリラ的に開催されることによって考古学と現代アートの領域横断が拡大しているという。

また、このフェスの目玉は古墳や埴輪関連のグッズ販売であるが、近年では実に様々な古墳や考古学関連のグッズが販売されている(古墳にコーフン協会・藍寧舎・大蔵屋などのホームページ参照)。それらは博物館のミュージアムショップで販売されている遺物のレプリカやぬいぐるみ、トートバックやボールペン・クリアファイルなどの文房具とは異なり、アーティストが製作したマニアックな置き物や文房具などの小物をはじめ古墳リュックや古墳クッションなど多岐にわたるもので、「古墳フェス はにコット」はこれらのグッズを製作する作家の作品発表と販売の場になっている。また、毎年今城塚古墳公園で実施される本フェス以外でも大阪市内の百貨店などでグッズ販売を中心とした古墳フェスが開催されている⁽²⁾。

⁽²⁾ 具体的には、2017年8月「古墳・はにわフェス」(うめだ阪急百貨店)、9月「古墳・はにわフェス in 高槻西武百貨店」、2018年4月「古墳・はにわフェス in 高槻西武百貨店」、8月「古墳・はにわフェス2～まるで古墳のドリームランド!～」(うめだ阪急百貨店)、9月「古墳・はにわフェス in 高島屋東堺店」、10月「古墳・はにわフェス in 高槻西武百貨店」、2019年4月「古墳フェス in 高槻西武百貨店」、8月「古墳・はにわフェス3～百貨店最大規模の古墳はにわフェス～」(うめだ阪急百貨店)、2020年9月「古墳フェス in うめだ阪急百貨店」などである。



写真1 「古墳フェス はにコット」の開催風景 (2017.11.26)

4. 「遺跡まつり」と考古学ブーム

「古墳フェス はにコット」はアートを中心に古墳や古代をテーマとした様々なイベントの集合体であり、従来の「遺跡まつり」とは様相が異なるものであるといえる。そして、埴輪や古墳関係のグッズの販売が大々的に行われているが、そこでは現代社会において新たな形で消費されている遺跡や遺物の姿を垣間見ることができる。例えば、そもそも「遺跡まつり」の会場にある古墳は当時の権力者の墓であり埴輪は墓に付属するものであるが、来場する若者にとってそこで販売されている埴輪などの物品類は、「かわいい」ものであり、「ゆるい」ものである。こうした傾向の背景には、2007（平成19）年の「ひこにゃん」が火付け役となった「ゆるキャラ」（ゆるいマスコットキャラクター）⁽³⁾のブームや2006（平成18）年および2009（平成21）年に放映されたフロッグマン原作・制作によるアニメ作品『古墳ギャルのコフィー』で登場する擬人化された古墳の存在が想定される。

また、こうした新たな現象は戦後の一連の考古学ブームとは一線を画すものであることも明白である。小川伸彦氏によれば、戦後の古代史ブームとしてあげられるのが、1959（昭和34）年の「埴輪ブーム」、1969（昭和44）年の「邪馬台国ブーム」（宮崎康平氏の『ま

⁽³⁾「ゆるキャラ」はイラストレーターのみうらじゅん氏が命名したものであるが（「ゆるキャラ」は扶桑社とみうらじゅん氏によって商標登録されている）、みうらじゅん氏は「ゆるキャラ」の定義について「ゆるキャラとは全国各地で開催される地方自治体主催のイベントや、村おこし、名産品などのPRのために作られたキャラクターのこと。特に着ぐるみとなったキャラクターを指す」（みうら2004）と述べている。

ぼろしの邪馬台国』刊行の2年後、松本清張氏の『古代史疑』刊行の翌年にあたる)、1972(昭和47)年の高松塚古墳における壁画発見を発端とする「古代史ブーム」がある(小川2002)。さらに、その後の全国的な発掘調査事例の増加とそれに伴う新たな発見によって遺跡がわが国で注目されるようになったが、1986(昭和61)年に発掘調査が始まった佐賀県吉野ヶ里遺跡(弥生時代)や1992(平成4)年に発掘調査が始まった青森県三内丸山遺跡(縄文時代)によって考古学ブームが引き起こされ、遺跡を観光資源として活用しようという動きがみられるようになった。全国の遺跡の現地説明会に多くの考古学ファンが足を運ぶようになったのもこの頃からである。その後、バブル経済崩壊の影響によって1990年代後半には発掘調査件数が減少し、2000(平成12)年に旧石器捏造事件(前期・中期旧石器時代遺跡捏造事件)が発覚してわが国の考古学界は逆境に立たされたが、それ以降も全国各地で地道な発掘調査が実施され、様々な調査研究の成果が公表されている。

これに対し、2010(平成22)年前後からわが国では考古学をめぐる新たな現象が生じている。2009(平成21)年に東京国立博物館で開催された『国宝土偶展』、2012(平成24)年にMIHO MUSEUMで開催された『土偶・コスモス展』、そして35万人が訪れた2018(平成30)年に東京国立博物館で開催された『縄文 1万年の美の鼓動』展などが契機となって「縄文ブーム」が起こっている。また、この時期には「土偶女子」と呼ばれる菅田亜紀子氏が『はじめての土偶』(菅田(武藤監修)2014)を出版し、フリーペーパー『縄文 ZINE』(縄文 ZINE 編集部2015～)が創刊され、2018(平成30)年に開催された『縄文 1万年の美の鼓動』展が多くの雑誌で取り上げられている(ダイアプレス(株)2018、都市出版(株)2018、目の眼(株)2018など)。さらに、2019(平成31)年には縄文研究者など縄文時代に関わる様々な人々を取り上げたドキュメンタリー映画『縄文にハマる人々』(山岡信貴監督、リタピクチュアル)⁽⁴⁾も公開されている。古墳についても2013(平成25)年に「古墳女子」であり古墳を題材にした楽曲⁽⁵⁾を多く発表しているブルースシンガーのまりこふん氏が「古墳にコーフン協会」を設立し、2014(平成26)年には『まりこふんの古墳ブック』(まりこふん2014)を刊行している。

このように、2010年代はわが国で新たな考古学ブームが生まれた時期であったが、こうした現代の「縄文ブーム」や「古墳ブーム」が以前と異なる特徴として、従来のような比較的年齢層の高い考古学マニアや歴史マニアが中心となったブームではなく、考古学には

⁽⁴⁾ 本作品公開時の山岡信貴監督の舞台挨拶で披露された逸話の中で興味深かったものとして、作品に登場した縄文研究者に縄文にハマった理由について尋ねたところ、何人もの研究者が「仕事だから」と答えたという話があげられる。

⁽⁵⁾ まりこふん氏の作品としては、2014(平成26)年リリースの『古墳 de コーフン!』(「古墳 de コーフン!」、「箸墓古墳の歌～卑弥呼★ShiningStar～」、「遥かなる石舞台」、「キトラ永遠に…」、「オブサンバイバー」、「さきたまの悲劇 part I」、「麗しの仁徳陵」、「ハニワのブルース」)や2018(平成30)年リリースの『装飾古墳』(「K.O.F.U.N. !」、「装飾古墳」、「新原・奴山古墳群の歌」、「熊野神社古墳の歌」、「大安場古墳の歌」、「しだみこぶんぶん」、「イキイキ!生目古墳群」、「come come* はにコット」、「仁徳陵に逢いたくて」)がある。また、ポピュラー音楽では、歴史好きのミュージシャン池田貴史氏のソロ・ユニットであるレキシが2007(平成19)年にアルバム『レキシ』を発表している。考古学に関連する楽曲としては、2ndアルバム『レキツ』(2011年リリース)の「狩りから稲作へ」、3rdアルバム『レキミ』(2012年リリース)の「ハニワニハ」、「古墳へGO!」、5thアルバム『Vキシ』(2016年リリース)の「旧石器バイベ」がある。

あまり詳しくない一般の人々や若者を中心にこうした現象が生まれていることがあげられる。インターネット上で盛んに取り上げられている「古墳女子」、「埴輪女子」、「土偶女子」、「縄文女子」などと呼ばれる人々が実際にどの程度存在しているかは不明であるが、こうした現象の背景には 2005（平成 17）年以降の歴史系のゲームやアニメの大ヒットにみられるポップカルチャーの影響、「歴女」・「仏女」・「城ガール」、さらには 2015（平成 27）年の新語・流行語大賞にもノミネートされた「刀剣女子」など若い女性を中心とする新たな流行現象の影響があったことが想定される。

5. おわりに

2010年代になって、わが国の「遺跡まつり」にも新たな考古学ブームの影響がみられるようになったことは、遺跡や考古学と現代社会の関係を考えるうえで興味深い現象である。本稿で紹介したようなアートや音楽のイベントやグッズ販売を中心とするフェス系の「遺跡まつり」もその一つであるが、これらの「遺跡まつり」は以前のものと比較すると地域の古墳や遺跡といったサイトスペシフィックな要素（在地性）が希薄となってしまう可能性を指摘できる。このことはその名称に地元の「まつり」ではなく不特定多数の人間が集まるイメージのある「フェス」が使用されていることにも反映されているように思われる。一方で、こうした「遺跡まつり」の新たな展開の背景に最近の若者を中心とした新たな考古学ブームの存在があると推測されるが、学問としての考古学とは別次元で遺跡や遺物が一方的に流用あるいは消費されることに対して、わが国の考古学者にも様々な反応がある⁽⁶⁾。

⁽⁶⁾ 現在のわが国の縄文時代研究を牽引する山田康弘氏は、縄文ブームについて著書の解説（山田 2018）で触れているが、その後講談社の『縄文時代の歴史』（山田 2019a）を執筆した経緯について記したインターネット記事の中で、近年の縄文ブームについて以下のように述べている（山田 2019b）。

空前の縄文ブーム！ しかし・・・

2018 年の夏は、縄文ブームだった。東京国立博物館で行われた特別展「縄文 1 万年の美の鼓動」は 35 万人もの入場者を集め、これと連動して縄文時代関連の書籍や雑誌が多数刊行されたほか、縄文土器や土偶をモチーフにした T シャツや文具など、多くの縄文グッズも販売された。さらには、縄文時代に関わる人々を取り上げた映画『縄文にハマる人々』も公開され、多くの観客を動員した。また、その少し前から、何かスピリチュアルなもの、アナクロなもの、アンシンメトリカルなもの、エコロジカルなもの、自然志向のもの、そのようなものを形容する言葉として縄文を頭に付けて、「縄文〇〇」と呼ぶ、現代版「縄文文化」も数多く見られるようになった。このような動向を、縄文時代・文化が学術的な領域を超えて一般化したものとして喜ぶ向きもある。しかし、そこで語られる縄文時代像の中には、研究者から見ても必ずしも考古学的事実に即したものではなく、思わず眉をひそめるようなものもあることは間違いない。くわえて、今回の縄文ブームは、特定の遺跡の保護活動などとは、ほぼ無縁であったということも、その特徴としてあげることができる。これまでにも、青森県山内丸山遺跡や鹿児島県上野原遺跡といった重要な遺跡の発見時などに、縄文ブームは起こっている。そして、それらのブームは当該遺跡の保存運動とも連動し、埋蔵文化財保護の機運を高めることにも一役買ってきた。しかしながら、今回の縄文ブームには、そのような動向はほとんど見られなかった。縄文を面白いものとして、「遊び心」を満たすためのツールとして利用している傾向が強く、様々な媒体に登場する縄文時代・文化に対する理解も、都合の良い部分のみがピックアップされた、表層的なものにとどまるものが多かった。その一方で、関東近県では、縄文ブームの最中に、学術的にも重要な意義を持った遺跡が、一度も外部に情報公開されることなく、開発のために破壊・消滅させられるという「事件」が起きていたことは、ほとんど知られていない。今回の縄文ブームは、遺跡の保存に対して何の効果もなかったことは記憶しておいてよいだろう。

遺跡とそれを取り巻く社会の関係を考えてゆくためには、遺跡を活用した町おこしや遺跡の観光利用(坂詰 2012)といった問題に限らず、過去あるいは現在において遺跡がどのように認識され利用されてきたか検討することもわが国の考古学にとって重要な研究課題である(櫻井 2011)。その意味で、本稿で取り上げた全国各地で実施されている「遺跡まつり」について様々な視点から検討することは、遺跡と現代社会の関係を知るための契機となるのである。

参考文献

- 岡本健一(1996)『古代の光—歴史万華鏡』三五館。
- 小川伸彦(2002)「ブームとしての古代史」荻野昌弘『文化遺産の社会学』新曜社。
- 「古墳ブームにみる遺跡活用の将来像」研究グループ(2017)『平成 29 年度大阪大学未来基金学部学生による自主研究奨励事業「古墳ブームにみる遺跡活用の将来像」研究成果報告書』。
- 誉田亜紀子(武藤康弘監修)(2014)『はじめての土偶』世界文化社。
- 誉田亜紀子(新津健監修)(2016)『ときめく縄文図鑑』世界文化社。
- 誉田亜紀子(2017)『土偶界へようこそ』山川出版社。
- 坂詰秀一(監修)(2012)『考古調査ハンドブック 7 観光考古学』ニューサイエンス社。
- 櫻井準也(2006)「消費される遺跡、継承される遺跡—「くずう原人まつり」にみる遺跡の活用—」『東邦考古』30号。
- 櫻井準也(2009)「文化資産としての遺跡—遺跡まつりと町おこし—」ヘリテージ・スタディーズ研究会『シンポジウム 文化資産の活用と地域文化政策の未来 論文集』。
- 櫻井準也(2011)『歴史に語られた遺跡・遺物 認識と利用の系譜』慶應義塾大学出版会。
- 櫻井準也(2014a)「遺跡まつりと地域アイデンティティ—「芝山はにわ祭」の事例分析から—」『尚美学園大学総合政策研究紀要』第 24 号。
- 櫻井準也(2014b)『考古学とポピュラー・カルチャー』同成社。
- 櫻井準也(2015)「考古学とポピュラー音楽—考古学と大衆文化をめぐる新たな動向—」『湘南考古学同好会々報』140 号(35 周年記念号)。
- 櫻井準也(2016a)「現代考古学の側面—遺跡活用の方途—」『考古学ジャーナル』690 号。
- 櫻井準也(2016b)「遺跡祭りと地域活性—千葉県芝山はにわ祭を中心に—」『日本民俗学会第 68 回年会発表要旨集』。
- 櫻井準也(2016c)「考古系造形物の世界」『東邦考古』40 号。
- 櫻井準也(2021)『マンガと考古学 その親密な関係を探る』六一書房オンデマンドライブラリー。
- 佐藤啓介(2016)「アートな考古学の風景 ⑤アートと考古学の協働を複数化する」『考古学研究』63 巻 2 号。
- 縄文 ZINE 編集部(2015～2020)『縄文 ZINE』1～11。
- ダイアプレス(株)(2018)『DIA Collection いま蘇る縄文』ニューサイエンス社。
- 都市出版(株)(2018)「特集 tokyo 縄文散歩」『東京人』399 号。
- 長井謙治(編)(2019)『ジョウモン・アート 芸術の力で縄文を伝える』雄山閣。
- 古谷嘉章(2019)『縄文ルネッサンス 現代社会が発見する新しい縄文』平凡社。

- まりこふん (2014a) 『まりこふんの古墳ブック』 山と溪谷社.
- まりこふん (2014b) 『古墳の歩き方』 扶桑社.
- まりこふん (2018) 『はにわ』 青月社.
- みうらじゅん (2004) 『ゆるキャラの本』 扶桑社.
- みうらじゅん (2009) 『全日本ゆるキャラ公式ガイドブック』 扶桑社.
- 村野正景・岡村勝行 (2015) 「アートな考古学の風景 ①「アートと考古学」ってなに？」『考古学研究』 62巻 2号.
- 目の眼(株) (2018) 「日本列島縄文アートめぐり」『目の眼』 503号.
- 毛利和雄 (2000) 「考古学ブームとマスコミ報道」『考古学ジャーナル』 456号.
- 矢澤高太郎・下島綾美・草野 厚 (2014) 「古墳探訪のすすめ」『三田評論』 No. 1183.
- 矢島 新 (2019) 『ゆるカワ日本美術史—ヴィジュアル版』 祥伝社.
- 山田康弘 (2018) 「文庫版あとがき」『縄文人の死生観』 株式会社 KADOKAWA.
- 山田康弘 (2019a) 『縄文時代の歴史』 講談社
- 山田康弘 (2019b) 「基礎知識があれば、縄文時代はこんなに楽しくなる 考古学が描く 真の縄文のすがた」【講談社現代新書インターネット記事】<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/59473>
- Renfrew,C.2003 *Figuring it out :What are we? Where do we come from? The parallel visions of artists and archaeologists.* Thames & Hudson.
- Renfrew,C. et al.2004 *Sunbstance,Memory,Display:Archaeology and Art.* McDonald Institute for Archaeological Research. Cambridge.

新聞記事

- 「遺跡も予算も発掘せよ 考古学施設のゆるキャラ続々」朝日新聞 2010年 11月 29日
- 「古代史キャラ、乱立の世」朝日新聞 2014年 6月 14日
- 「前方後円墳がキュート!? “古代ロマン萌え女子が激増中”」毎日新聞 2014年 11月 17日
- 「古墳モテモテ、若者「グッズ安らぐ」 イベントに2万人」日本経済新聞 2017年 5月 25日
- 「古墳のくびれってカワイイ 女子魅了、驚きのグッズ続々」朝日新聞デジタル 2018年 5月 27日

Web マガジン

- 「土偶の世界にハマる「土偶女子」が増加」 fashionsnap.com/article/2014-08-09/dogu-joshi/

ホームページ

- はにコットホームページ <https://hanicotto.com>
- 古墳にコーフン協会ホームページ <https://kofun.jp>
- 藍寧舎ホームページ <http://ranneisha.com>
- 大蔵屋ホームページ <http://okura-hd.jp/kofun/kofun-goods.html>